

Suggested Answer

夢の話をするとき、最初によく心に浮かぶのは、夢の中では尋常でない現実離れした出来事が起こるということである。夢の中で私たちは何年も前に亡くなった人に出会う。気がつくやと突然遠く離れた土地にいる。動物が話しかけてきたり、目覚めているときであればまったく不可能であると居えるような力を自分が持っていたりする。もし誰かが、起きているときに同じような経験をしたことがあると言えば、私たちはその人の正気を疑うことであろう。

まず夢の一番重要な特徴をもっと正確に説明することから始めよう。夢を見ている人は、気がつくやとよく突然に変わる環境の中にいる。もっとも、時には場面の変化がもっと徐々に起こることもあるが、過去の光景や人々が現れる。明らかに空間と時間の法則が夢の中で中断されているのである。夢のもうひとつの重要な特徴は、私たちを釘付けにする性質である。私たちの注意はある特定の出来事や物体に引きつけられ、そこから注意をそらすことができない。何か他のものに自分の考えを向けようとすることができないのである。アメリカの睡眠研究者アラン＝レヒトシャフェンは、夢には想像力が欠けている、という逆説的ではあるが正しい意見を述べた。夢を見るとき、私たちの心は目覚めているときのように横道にそれたりはしない。その夢の像が夢全体を満たしており、他のことを空想する余地はまったく残っていないのだ。夢の持つこうした「ひたむきさ」こそ、夢が独自の自己充足した世界で生じるというあの独特の感じを説明するものである。夢の中では他の人たちも登場するが、私たちは基本的には一人であると感じ、自分の経験を他の誰にも伝えることはできない。私たちはその経験に完全に支配されてしまって、それについて熟考することも評価することもできないのだ。その結果、私たちは夢の中ではこの上なく驚嘆すべき状況でも別段驚くこともなく受け入れるし、「でも、そんなことあり得ない!」などと叫んだり抗議することも決

してないのである。

次に挙げる夢の話は、古い中国の文献に依るものであるが、夢の逆説的な閉じた世界を見事に説明している。

昔あるとき、私は蝶になった夢を見た。あちらこちらにひらひらと飛び回り、まぎれもなく蝶であった。私は蝶になった幻想を追うことしか意識がなく、人間としての自分自身を意識していなかった。突然目が覚めると、私はそこに横たわり、自分自身に戻っていた。私は蝶になった夢を見ていた人間だったのか、それとも今の私は人間になった夢を見ている蝶なのか、今となってはわからない。

一般的に言って、夢の世界は目覚めると同時に消滅する。あとしはせいぜいぼんやりとした記憶が残るだけである。朝になって夢を見たことに気づくことがよくあるが、何の夢であったか思い出すことはできない。頻繁に夢を見るレム睡眠に毎晩1、2時間は費やされることを思い起こすと、夢の記憶が消える度合いというものは実に著しいものであるように思われる。何かの夢を見た直後に目覚めて、この夢のイメージがまだ心の中に鮮明に残っている場合でも、そうしたイメージを説明するのは難しく、説明しようとしてもめったにうまくいかない。たとえ夢の中で起こったことを首尾よく正確に説明することができたとしても、その夢の独特の雰囲気を出して、それを別の人に伝えるのはやはり普通は不可能である。スイスの詩人カール・シュピッテラーが言ったように、「夢は語るができない。理性ある心が夢を言葉でとらえようとすれば、夢は溶けて消えてしまう」のである。